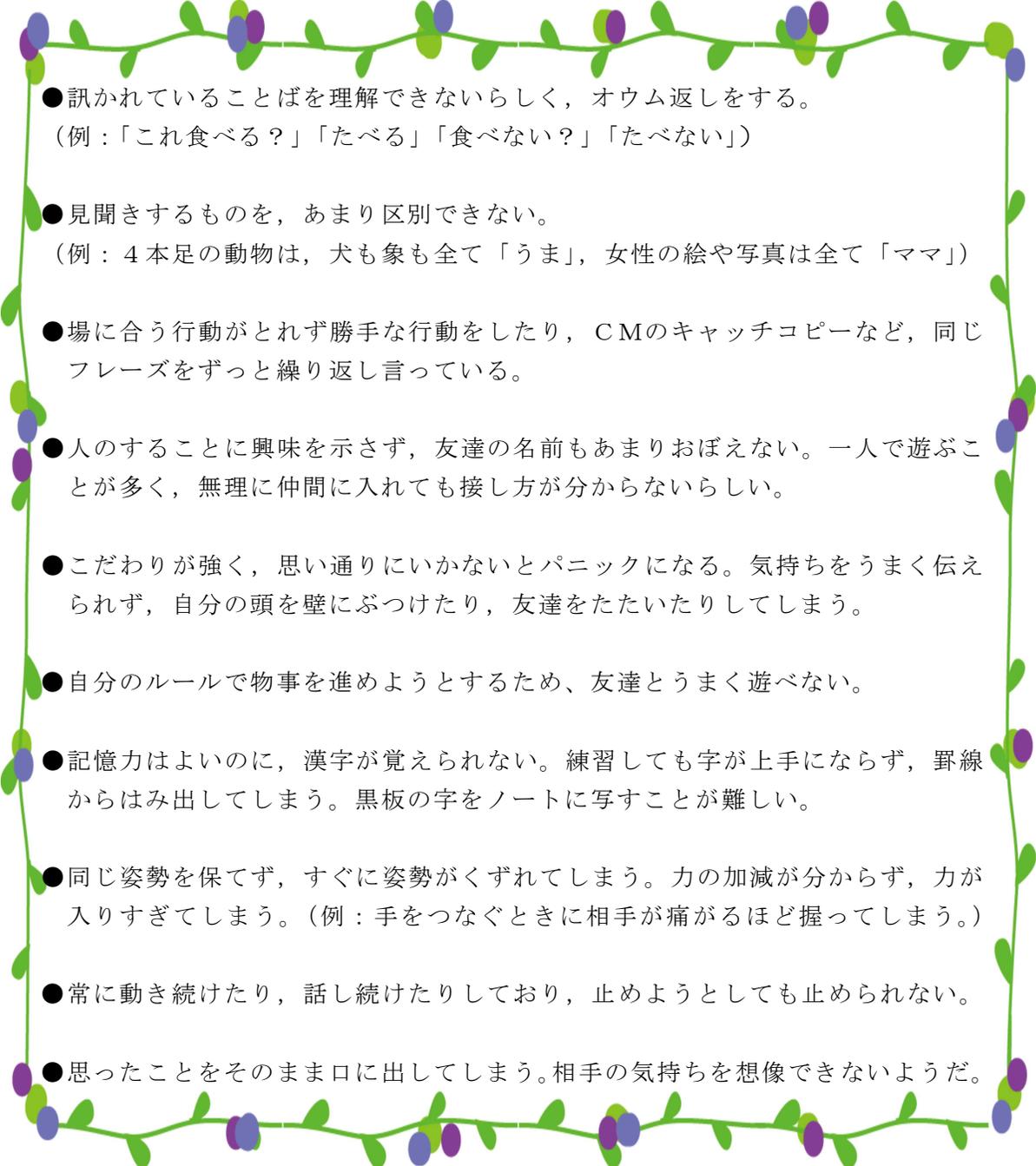




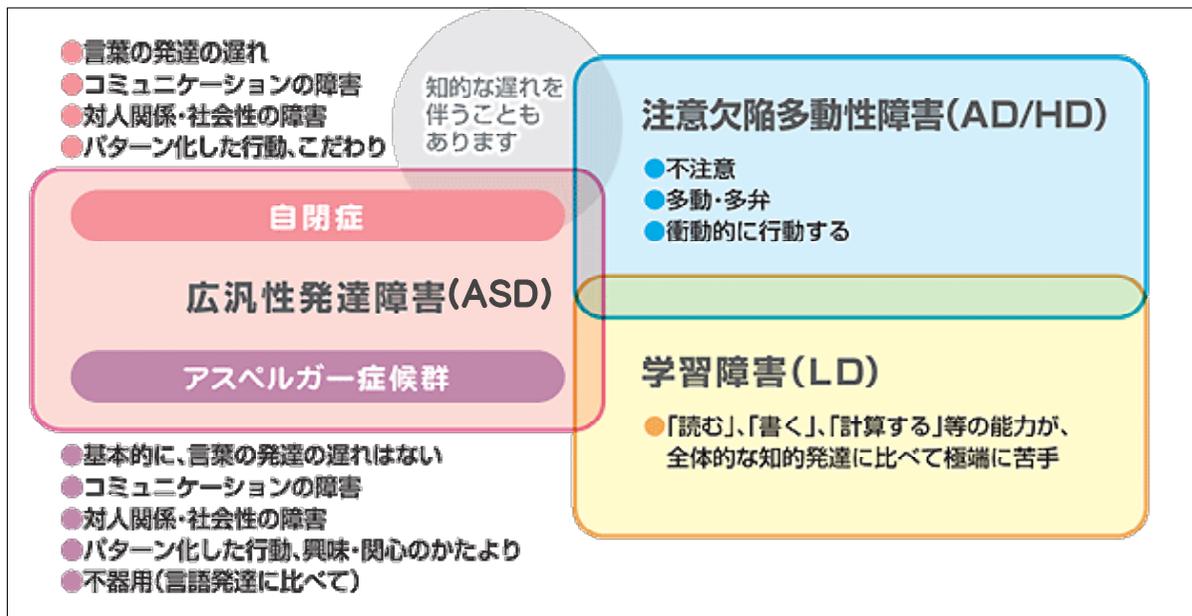
暑い日が続くようになりました。「ゆうき」にも子供たちが暑さに負けず、元気に通級しています。さて今回は、「発達障害」についてお知らせしようと思います。

まずは、ことばの遅れや行動・認知などを心配して「ゆうき」に相談に見える保護者の方々の声を一部ご紹介します。

- 
- 訊かれていることばを理解できないらしく、オウム返しをする。
(例：「これ食べる?」「たべる」「食べない?」「たべない」)
 - 見聞きするものを、あまり区別できない。
(例：4本足の動物は、犬も象も全て「うま」、女性の絵や写真は全て「ママ」)
 - 場に合う行動がとれず勝手な行動をしたり、CMのキャッチコピーなど、同じフレーズをずっと繰り返し言っている。
 - 人のすることに興味を示さず、友達の名前もあまりおぼえない。一人で遊ぶことが多く、無理に仲間に入れても接し方が分からないらしい。
 - こだわりが強く、思い通りにいかないとパニックになる。気持ちをうまく伝えられず、自分の頭を壁にぶついたり、友達をたたいたりしてしまう。
 - 自分のルールで物事を進めようとするため、友達とうまく遊べない。
 - 記憶力はよいのに、漢字が覚えられない。練習しても字が上手にならず、罫線からはみ出してしまう。黒板の字をノートに写すことが難しい。
 - 同じ姿勢を保てず、すぐに姿勢がくずれてしまう。力の加減が分からず、力が入りすぎてしまう。(例：手をつなぐときに相手が痛がるほど握ってしまう。)
 - 常に動き続けたり、話し続けたりしており、止めようとしても止められない。
 - 思ったことをそのまま口に出してしまう。相手の気持ちを想像できないようだ。

発達障害とは…

「発達障害」は子供の発達途上で現れる様々な脳機能の障害のことで、まだ解明されていない部分が多くあります。図のように症状が重なり合い、はっきりと区分できない場合もあります。



「おかやま子育て応援サイト こそだてぼけっと」より 一部加筆

一言で発達障害といっても、その症状は様々です。また、他にはない特別な感性や能力を持っている子供たちもいます。そもそも、世の中に一人として同じ人間は存在しません。「障害」としてネガティブに捉えるのではなく、その子の「特性」として考え、できることを伸ばし、自己肯定感(いてもいいんだ、という気持ち)、自己有用感(自分は役に立つ、できることがあるという気持ち)を育てていくことが大事です。二次障害(極度の不安症、自傷行為、うつ など)に陥り、さらに辛く苦しい状況に子供たちを追い込まないためにも、周囲の大人が理解を深め、環境を整えていきましょう。

家庭では、規則正しい健康的な生活をする中で、一緒に計画を立てて実行する機会を増やしましょう。親子で家事をしたり、遊んだりする中で、コミュニケーション意欲が養われます。また、ゆっくりはっきり、簡潔に話しかけましょう。「〇〇しない」ではなく、「△△します」と具体的に話すとうわりやすいことが多いです。行動を注意する場合は本人ではなくその行動が良くないことを伝えてください。また、予定を立て、時間に区切りをつけると行動の目安となり、ゆくゆくは自立の一步につながります。

「子供が発達障害では？」と迷ったら、各学校のスクールカウンセラーや県や市の窓口へご相談ください。子供の障害を見つけるためではなく、「何が苦手で何が得意か」を明らかにするためです。得意なところは褒めることができ、苦手なところは、その後の支援につながられます。サポートルームでは、それぞれの子供の困難さが軽減されるように保護者、関係機関、学校と連携して支援していきます。